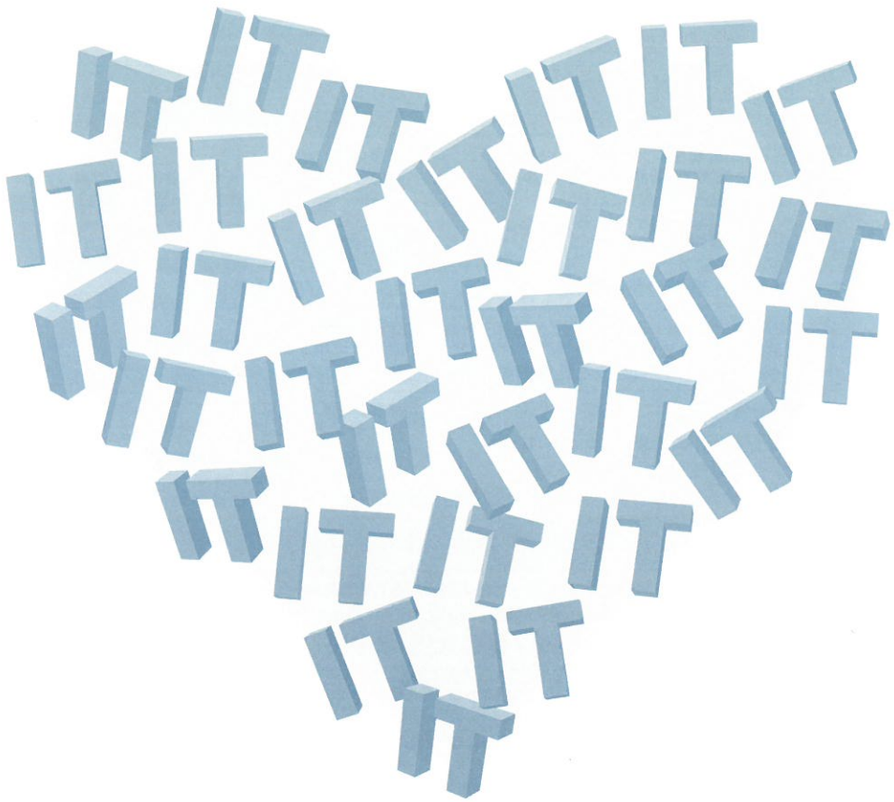


ITが人と社会にできること

日本ユニシスは、東京ニューシティ管弦楽団と
ヴァイオリニスト 川畠成道さんを応援しています。

透明な経営を展開し、お客様に価値ある製品や技術をお届けする一方で、
良き企業市民としての活動も大切にする･･･
私たち日本ユニシスグループは一丸となってさまざまなCSR活動に取り組んでいます。

■信頼される企業をめざして　コーポレートガバナンス、コンプライアンス、情報セキュリティ、リスク管理･･･
■なくてはならない企業をめざして　お客さまの価値向上、先進技術の提供、安定したIT基盤の提供･･･
■期待される企業をめざして　環境負荷軽減、地域貢献、メセナ、スポーツ振興･･･

U&U Users & Unisys　www.unisys.co.jp/csr/
日本ユニシス株式会社
UNISYS

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団
第54回定期演奏会
2008年3月21日(金)19時開演
東京芸術劇場大ホール
Tokyo Metropolitan Art Space Large Hall
主催:東京ニューシティ管弦楽団
後援:日本シベリウス協会

最近の東京ニューシティ管について　～多彩にして刮目すべき展開～

最近の東京ニューシティ管弦楽団の活動には目覚しいものがある。むろん演奏水準の著しい向上もさることながら、何より音楽に対する真摯な取組みにひたむきな情熱を感じさせるのだ。それは楽譜の版の選択や弦のヴィブラートに対する扱いに顕著であるが、同時にしっかりとした検証に基づく理念でもある。版について、ベートーヴェンやメンデルスゾーン、また今回のシベリウスなどではブライトコップ新版を使用、ブルックナーでは新発見の「キャラガン校訂版」によるなど、従来の奏法を見直した上で、伝統からなお新しい解釈を引き出そうとする創意は極めて鮮やかだ。

さらに作品によってはノン・ヴィブラート奏法を採ることも多い。と言っても単に昨今の流行に沿って、何でもかんでもノン・ヴィブラートという訳ではなく、細かなテクスチャーやフレーズを丹念に研究しながらその是非や、全体を俯瞰する中での音楽的意味によって判断されていることが伝わってくる。バロック時代には既に存在し、しかし19世紀にはその使用が抑えられたヴィブラートは、作品ごとに相応しく用いられて初めて、作曲家が意図した演奏スタイルが明確に蘇ってくるのである。

いずれにせよ、、多彩にして刮目すべき展開である。

■交響詩「フィンランディア」Op.26

ジャン・シベリウス（1865～1957）は、10数曲に上る交響詩を書いた。著名な「トゥオネラの白鳥」を含む1896年の「4つの伝説曲（レンミンカイネン組曲）」から、1925年の「タピオラ」に至るまで、それらの多くはフィンランドの叙事詩「カレワラ」に基づいている。

13世紀から19世紀初頭まで、フィンランドはスウェーデン支配下による大公国であった。ところが1808年フィンランドへロシアが侵攻、当初こそ大公国待遇であったものの、ロシア皇帝がニコライ2世に代わると強引な属領化政策が推進された。そのためフィンランドでは愛国独立運動が激しく高まった。その機運のひとつとして1899年、民族的歴史劇「いにしえからの情景」を上演する計画が持ち上がり、シベリウスはそれに共鳴して劇音楽を作曲することになった。

このときシベリウスが作曲したのは、8曲からなる管弦楽組曲。シベリウスの作品中もっとも広く親しまれることになったこの「フィンランディア」は、その最終曲を1900年に改訂して独立させた交響詩である。このタイトルは、外国語式に表記されたものであって、フィンランドでは、その国名と同様に「スオミ」と呼ばれることもある。

またこの作品の中間部の旋律は、「炭火」などで知られる詩人ヴェイッコ・コスケンニエミ（1885～1962）のテキストにより「フィンランディア讃歌」と呼ばれる合唱曲に編作されており、現在のフィンランドでは準国歌のように愛唱されている。

■ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 Op.8

「セレナード」や「ユモレスク」など、ヴァイオリン独奏とオーケストラのための小品を除くと、シベリウスが書いた協奏的作品はこの「ヴァイオリン協奏曲」だけである。作曲者自身が青年時代、ヴァイオリニストを目指したことも影響しているのだろう。

交響詩「フィンランディア」の成功など、その頃すでに作曲家として国際的な名声を築いていたシベリウスは1900年、ロベルト・カヤヌス指揮ヘルシンキ・フィルハーモニー協会とヨーロッパ演奏旅行を敢行、パリ万国博覧会で演奏するなど各地で熱狂的に歓迎された。その翌年にはベルリンで「交響曲第2番」を書き上げたが、1902年からの2年間をフィンランドの首都ヘルシンキで過ごした。そのときに書かれたのが、「悲しきワルツOp.44」と、この作品である。

1904年2月8日、ヴィクトル・ノヴァチェクのヴァイオリン独奏、作曲者の指揮によって初演されたが、当時の評判はあまり芳しいものではなく、その後シベリウスは推敲を重ねて1905年に完成させている。同年、シベリウスはブラームスのヴァイオリン協奏曲を聴いて、その真に交響的な様相に衝撃を受けた。初稿では、独奏楽器の名技性があまりに強調されていたため、シベリウスはそれを抑え、室内楽的で緊密な書法に、より重厚なシンフォニック的要素を加味して改作に臨んだと伝えられている。

第1楽章　アレグロ・モデラート ニ短調 2/2拍子
第2楽章　アダージョ・ディ・モルト 変ロ長調 4/4拍子
第3楽章　アレグロ、マ・ノン・トロッポ ニ長調 3/4拍子

■交響曲第2番 ニ長調 Op.43

シベリウスにとって、交響曲の創作は自身の交響詩とは異なり、純音楽としてのアプローチによって行われた。フィンランドの民族的精神を徹底的に交響詩に注入する一方で、西洋音楽の根幹としての交響曲に対しては云わば伝統への挑戦という意味を込め、具体的な標題を一切つけなかった。唯一「クレルヴォ交響曲」として知られる作品も、シベリウス自身がタイトルを与えた訳ではなく、当初は「独唱者と合唱、管弦楽のための交響詩」との副題を添えた。しかしながらその内容や規模からの愛称が今日では一般的になっただけである。

シベリウスは、交響曲を7曲残した。「第8番」の存在については論議の的となり、かつては作曲者によって焼却されたとも言われていたが、近年アイノラの自宅から膨大なスケッチが見つかっており、研究が進んでいるという。7曲の交響曲は、第2番まではロマン的な傾向を示し、第3番では方向性を模索、第4番ではさらに様式を変化させている。19世紀から20世紀に至る世紀越えに同調しているかのようでもある。

この「第2番」は、その中でもっとも広く親しまれている交響曲である。その主題には、フィンランドの民謡的な色彩が濃厚だが、素材をそのまま用いたのではなく、風趣を尊重しながらの斬新なオリジナリティが加えられている。1901年にイタリアに旅行したシベリウスは、その気候や風土にインスピレーションを受けて作曲したと言われ、帰国してから1903年に完成させた。旅行を援助した友人のアクセル・カルペラン男爵に献呈されている。

なお、第3楽章から第4楽章にかけては続けて演奏するように指定されている。

第1楽章　アレグレット ニ長調 6/4拍子
第2楽章　アンダンテ・マ・ルバート ニ短調 4/4拍子
第3楽章　ヴィヴァチッシモ 6/8拍子
第4楽章　アレグロ・モデラート ニ長調

ニューシティのモットー

「いつも なにかが あたらしい」

今回は何が？

内藤 彰
Akira Naito

正しいシベリウスの演奏スタイルとは？

私と東京ニューシティ管弦楽団は、ここ数年、ピリオド奏法（作曲家が作曲していた当時の演奏法;20世紀初頭までの弦楽器奏法は、現在行われているようなヴィブラートによって表情をつけるのではなく、現在はほぼすたれてしまった、特有な弓使いによって曲想を豊かに表現していた。）を用いることにより、少しでもそれぞれの楽曲の本来の演奏スタイルに近づくよう努力してまいりました。日本でも古典派以前の曲に対しては昨今この奏法がポピュラーになりつつありますが、それだけでは残念ながら片手落ちと言わざるを得ません。ロマン派の作曲家もそれまでの作曲家同様、現在流行っているヴィブラートを取り入れたオーケストラの響をほとんど知らないまま、ピリオド奏法のサウンドを前提にして作曲していたのです。昨年からは私たちもその史実にのっとり、ロマン派の曲にも積極的にこの奏法を取り入れ始めました。メンデルスゾーン、ブルックナーときて、いよいよ本日はピリオド奏法と現在のヴィブラート多用奏法との過渡期に位置する曲にチャレンジすることになりました。

本日の3曲は、いずれも1900年前後に書かれたものです。書かれた当時は、オーケストラの中でヴィブラートがほとんど使われていなかったというだけではなく、独奏者の奏法も、音楽史上に名を残し、この協奏曲とも関りのある世紀の名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムや、パブロ・デ・サラサーテも、当時発明されたばかりのレコードによれば現在のような華麗なヴィブラートはかけておらず、その初期段階といえるある程度のヴィブラート（振幅の狭い）は使用していたものの、原則的にはピリオド奏法スタイルの影響が色濃く残っていたことが伺えます。現在有名な19世紀のヴァイオリン協奏曲の多くは彼らによって初演され広められてきたことからも、それらの曲は、独奏者までもが現在のような華麗なヴィブラートをかけていなかったことが分かります（前述のように初期段階ともいえるわずかなヴィブラートの使用に留まっていたと推測されます）。

一方では19世紀中にはすでに、そういった現在のヴィブラートの起源とも言える、今から見ればきわめて低レヴェルなヴィブラート奏法が陰ながら（当時そういった奏法は高尚ではないとされていた）市民権を得つつあったことも事実です。ある音楽会で、当時としては珍しいそういった、ヴィブラートを敢えてひけらかしたような演奏を聞いた観客が、大いに喜んで（面白がって?）拍手喝采であったとの記述も残っています。但しもちろん、フォーマルではない演奏会での話ですが。

こういった時代背景の中、基本的にはピリオド奏法のすっきりと、活き活きした響を前提に作曲していたシベリウスも、長生き（92歳）したおかげで後年徐々にオーケストラによるヴィブラート奏法の広まりを経験するようになっていきました。

この辺が難しいところなのです。本当にシベリウスの意図に沿った演奏をしようと思った場合当然のこととして、作曲当時のことだけでなく、その後彼がそういった奏法の変化を目の当たりにしてどう対処していったかを知る必要があります。

21世紀になった今、完全に彼のことを理解することはもちろん不可能ですが、幸い作曲後30年近く経ち、ヴィブラートがかなり一般的になってきた1930年ごろに録音されたシベリウスのレコード集から、その辺りの状況を推測することができます。指揮は彼の先輩でもある作曲家・指揮者のロバート・カヤヌスです。

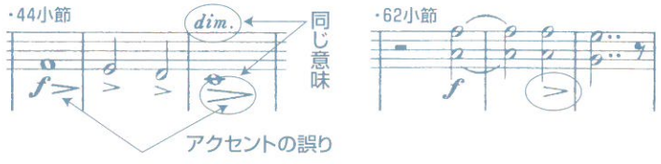
おそらくシベリウスも認めていた（立ち会っていた?）であろうこのレコードからは、前述のようにきわめて振幅の少ないヴィブラートが各所に認められます。もちろん現在なら幅広く流麗なるヴィブラートを駆使する重要な部分で、強いてノンヴィブラートっぽいまま演奏されている箇所も多く残っていることは言うまでもありません。そして、シベリウスが作曲当時イメージしていたピリオド奏法による軽い快活なイメージは依然として存在しており、シベリウス自身によって晩年付けられたというメトロノームの数字（イギリスの雑誌に掲載された）も、またそれと極めて近かったと言われるカヤヌスの演奏テンポから推測しても、作曲後30年経った時点で、本質的には作曲当時のピリオド奏法のイメージから離れていなかったことがうかがわれます。現在のヴィブラートいっぱいによる堂々たる重めの演奏は、最後まで彼のイメージからは遠い存在であったようです。

本日はその辺を考慮し、作曲当時のピリオド奏法を原則としながら、多少はその後の流行も加味してみたいと思っています。日本でももちろん初めての試みであり、ひょっとしたら世界でも初めてかもしれません。早くこういった本来のスタイルでの演奏が、世界中で当たり前になることを願って頑張ります。

フィンランディアの楽譜はミスのオンパレード?!

クラシックファンでない人にまで広く知られているこの有名な曲の譜面には、考えられないほど多くの次元の低いミスがあります。私の知る限り（実演、CD等数十種類の演奏）では、名演といわれているものも含め、いまだにそのミスの多くは間違ったまま演奏され続けています。それらの多くは曲の始まりの、'ロシアの圧政に耐えて重苦しく…'と言われている部分に集中しています。

1）アクセント記号（＞）がディミヌエンド（だんだん弱く）記号の＿＿＞と間違われ、とても奇妙な楽譜になっている部分が多い（35・44・46・63・67小節他）。



これらを譜面どおりディミヌエンドで演奏しますと、どのような解釈で演奏しようとしてもつじつまが合わなくなり、音楽的に不自然なものとなってしまいます。

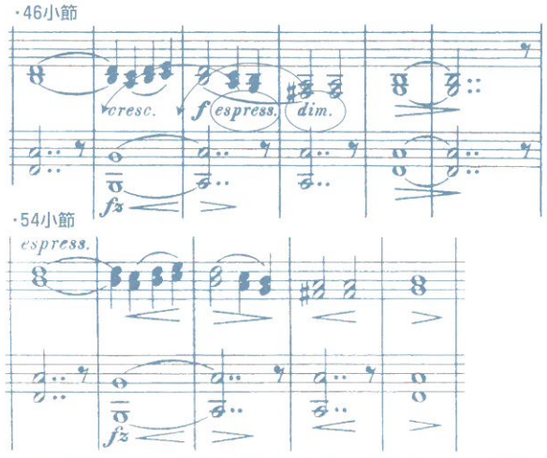
特に46小節にいたっては、ディミヌエンド記号であるdim.と＿＿＞という同じ意味の記号が同じ箇所に併記されているという、ミスであることを証明しているような、ありえない印刷がされています。これもアクセント記号＞を間違えて＿＿＞と書いてしまったと解釈すれば、アクセントの後にdim.が来るという、きわめて自然な表記法になり、音楽的にも十分納得がいくものとなります。

同じ間違いが現在フィンランドの第2の国歌とも言われている中間部の有名な旋律の部分にも見られます。137・142・166・174小節他。

これらの部分の楽譜が正しいとして演奏しようとする時、指揮者は大いに悩んだ果てに、結局は正しい解釈ができないまま、その誤った指示を無視するか、曖昧にごまかして演奏するしかありませんでした。いかにも恥ずかしそうに（私もかってそうでした）。複数のCDをお聴きください。おそらくどの演奏も曖昧模糊としたものになっているはずです。しかしこれらの単純ミスを修正しますと、きわめて明快で自然な演奏が、いとも簡単にできるようになること請け合いです。

2）発想記号の1小節づつのずれ

同じパターンの旋律が書かれている46～51小節と、54～58小節に関してですが、



48小節のespress.と49小節のdim.を1小節ずつ前の小節にずらすと、54～58小節と整合性がとれ、それよりも何よりも音楽的にきわめて自然になります。それに対して多くの演奏に見られるように、間違った譜面をそのまま演奏しようとした時、きわめて矛盾に満ちた曖昧な演奏でごまかす以外方法はありません。これも多くのCDで確かめてください。49小節のdim.と次の＿＿＞を一体どう処理するのでしょうか?ちなみに本来49小節には当然57小節と同じ＜＿＿がくるはずです。

この1小節のずれ?も、自筆譜を書き写す時によくある誤りです。たとえば長いスペルの発想記号を限られた小節の中に書き収めなければならない時、何かの事情で本来の小節内に書くスペースが足りなく、そのためやむなく小節をまたいで記されてしまったとしましょう。よくあることです。この場合、その発想記号が前の小節に付けられているのか、次の小節の方に書かれてあるのか判断つかなくなったとしても、他人である写譜をする人を責めることは筋違いでしょう。結果として間違った方が選択されてしまい、それがそのまま後世（現在）にまで伝わっていき…、などという残念な例は枚挙に暇がありません。作曲家に確かめられない場合には、まさに'丁か半か'確立5割としか言えない場合もあります。その結果裏目にでるとここの部分のように、発想記号が1小節づつ本来の小節より後にずれて書かれることになってしまうのです。

このようにして、この小節に偶然出来上がってしまった奇妙なフレーズは、誰にも気づかれないまま百年以上もの間指揮者を悩まし続け、あやふやな演奏を余儀なくされ続けてきたのです。まさに悲劇というしかありませんね。

3）シベリウスはティンパニパートにトリルを多用しています。

そしてそのトリルが続く時、ずっと均一にトリルを続けるのか、いったん切ってもう一度叩き直す（あるいは切らないままで、もう一度リズムに合わせてはっきり叩き直す）のか等をはっきりと楽譜上に指示しています（このティンパニの譜面に関する限り、誤りはないと私は確信しています）。

〈ティンパニ〉

これは彼の他の曲でも同じことが言え、例えば今回の交響曲第2番でも明確な書き分けが各所になされています。

しかし細かく書かれた叩き直しの指示は、今まで何故か世界中で無視され、せっかくシベリウスが頭に思い浮かべた効果的なメリハリは、無残にも生かされないまま、それが慣習となっていまだに世界中で誤った?演奏が行われています（と私は確信しています）。今回は、彼の意思と私が信じるとおりに演奏いたします。聴き慣れなく驚かれるところがあるかもしれませんが。

指揮者はこれらをしっかりとわきまえて演奏しなければなりません。結構リスクの伴う仕事なのです。間違っていてもそのまま慣例に従って演奏をしていれば、たとえ後からそれが誤りだと分かっても、その指揮者個人の責任は問われないでしょう。"みんなで渡れば怖くない"…。

しかしいくら正しい修正を施し、作曲家の意図に沿った演奏を実践しようとしても、下手をすると、逆にそれが誤りであるかのごとき冤罪をかぶせられて音楽界から葬り去られるかもしれません（泣）。そういう可哀そうな目にあった先輩も過去には大勢…（悲）。

しかしそれを考えていたら日本中にたくさんオーケストラと指揮者が存在する中で、内藤彰と東京ニューシティ管弦楽団の存在理由がなくなってしまうかもしれませんね（笑）。

Profile

指揮:内藤　彰 NAITO Akira (Conductor)

名古屋大学理学部卒業。在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を3年間務める。これまでに新日本フィル、東フィル、東響、新星日響、シティ・フィル、神奈川フィル、名フィル、九響他、日本の多くの主要オーケストラを指揮。1990年東京ニューシティ管弦楽団を設立。

海外では、1991年ベオグラードフィルを指揮、1992年には、モスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮し、ロシア音楽の魂を日本人から教えられたと絶賛された。その後1996年5月、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて『セヴィリアの理髪師』を、1997年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』を指揮。また2001年3月サンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団、2002年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演し、新聞各紙に大きく取り上げられた。2001年12月北ハンガリー交響楽団、2002年7月ミラノスカラ座フィルのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアーを、2003年3月にはメキシコ州立交響楽団を指揮。2007年11月上海音楽祭に出演。

2004年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』の公演にて、作曲者プッチーニの強い願いにもかかわらず初演以来一度も使われてこなかった、日本の伝統的'かね類'(寺の釣鐘の音、お椀型のキン、風鈴他)に、12音の音程を持たせ'楽器'として特注創作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』の世界初演に成功し、音楽界の話題となった。更に2004年7月には、イタリアのプッチーニ・フェスティバルにおいて、この鐘が使用され、地元の新聞・テレビに大きく取り上げられた。

2004年9月には、ブルックナーの交響曲第8番のAdagio楽章の新稿を、楽譜を起こすところから関わり、世界初演を果たした。この"ブルックナー新稿の世界初演シリーズ"の話題は、多くの新聞、音楽雑誌を賑わすのみならず、ライブ録音のCDも、「レコード芸術」誌他で、非常に高く評価されている。また、日本初のブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスも大いに注目を集めた。現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者。

日本指揮者協会幹事。

ヴァイオリン:川畠 成道 KAWABATA Narimichi (Violin)

©ビクターエンタテインメント

現在、日本で最も注目を集めているヴァイオリニストの一人。

英国をベースにソリストとして国際的に音楽活動を展開している。

視覚障害を負った幼少期にヴァイオリンと出会い、音楽の勉強をはじめる。

1994年、桐朋学園大学を卒業。英国王立音楽院に留学。

1997年、四半世紀に一度開催される英国王立音楽院創立175周年記念コンサートでソリストとして演奏する栄誉に浴し、同年、首席卒業。

1998年、サントリーホールにて日本デビュー。

2002年9月ニューヨークのカーネギーホールデビューを果たし、絶賛を博す。

2004年7月英国にてチャールズ皇太子主催のリサイタルに邦人アーティストとしては唯一人招かれ、英国人ピアニストとのデュオで現地メディアから高い評価を得た。デビューアルバム「歌の翼に」が20万枚以上の大ヒットとなり、セカンドアルバム「アヴェ・マリア」もヒットチャート1位を連続記録。

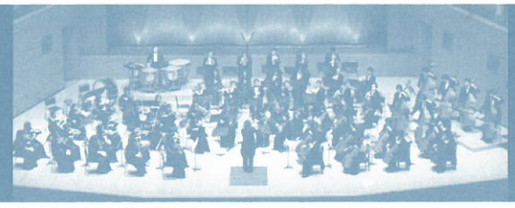
2007年3月には通算8枚目の最新アルバム「美しき夕暮れ」をリリース。

音楽活動の傍ら、積極的に国内外で平和・弱者に光を当てるチャリティー・コンサート活動に取り組んでおり、「社会派アーティスト」としての側面も持っている。現在、中学音楽鑑賞教材や高校英語教科書に彼の映像や文章が使用されており、その音楽性のみならず、人格面においても多方面に大きな影響を与えている。

川畠成道オフィシャルサイト　http://www.kawabatanarimichi.jp

東京ニューシティ管弦楽団　いつも なにかが あたらしい

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA



東京ニューシティ管弦楽団は、1990年、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し設立された。定期演奏会の他、名曲コンサート、オペラ・バレエとの共演、音楽鑑賞教室、レコーディングなど幅広く活躍。定期演奏会では、古典奏法も加味したブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルス、ブルックナー新稿の世界初演など、斬新な内容で話題をよんでいる。

オペラの分野では特に評価が高く、二期会、藤原歌劇団のオペラ公演の他、レナータ・スコット、アルフレード・クラウス、ヘルマン・プライ、ルチアーノ・パヴァロッティ、カルロ・ベルゴンツィ、アグネス・バルツァほか世界で活躍するオペラ歌手との共演も数多く、聴衆や批評家のみならず、世界の著名オーケストラと共演している彼らからも、心からの絶賛の言葉を贈られている。バレエの分野では、国内の主要バレエ団の他、英国バーミンガム・ロイヤルバレエ団、ミラノスカラ座バレエ団、シュツットガルトバレエ団、モンテ・カルロバレエ団等海外からのバレエ団の日本公演にもこれまで数多く出演し、公演をサポートする誠実で質の高い演奏が毎回非常に高い信頼と評価を得ている。また、多彩なゲストを迎えてのファミリーコンサートや、Jリーグ・アウォーズ、バート・バカラック、さだまさしツアーなどポピュラーの分野でも、大変評判がよく、多くの皆様から親しまれている。

2007年11月に中国上海公演(上海音楽祭)を行い、大成功を収めた。

●音楽監督・常任指揮者
内藤　彰

●首席指揮者
曽我　大介

●コンサートマスター
鈴木　順子

●客員コンサートマスター
浜野　考史

■事務局

●事務局長
作田　忠司

●事務局次長
高松　正典
渡辺　晶子

●営業顧問
杉山　繁三

●スタッフ
相吉澤　絵里
木村　有美子
黒木　英一
鈴木　光子
桜井　聖子
高松　順子
武曽　眞紀子
古屋　修
松本　敬子
山本　ふさこ

●マーケティング・アドヴァイザー
石井　友二
本田　瑞穂

ヴァイオリン
荒巻　泉
伊東　佑樹
上田　博司
大竹　奏
岡田　邦子
小澤　郁子
栗原　りか
剣持　由紀子
小島　光敬
笹井　飛鳥
高階　久美子
徳井　えま
○富山　ゆりえ
中川　さと子
中澤　真理子
中村　朱見
山江　洋子
山川　奈緒子(＊)

ヴィオラ
○桜井　多美子
浅川　文
宇佐美　久恵
久郷　寿実子
竹鼻　江美子
堀江　冬子
松田　美奈子

チェロ
○齋藤　章一(＊)
大島　純
葛西　英一
冨成　倫子
船田　裕子
星野　敦
望月　直哉

コントラバス
○徳高　宏行(＊)
青山　幸成
照井　岳也

フルート
○井ノ上　洋(＊)
丸田　悠太

オーボエ
○徳田　振作(＊)
池田　祐子

クラリネット
○西尾　郁子(＊)
松元　香

ファゴット
○藤田　旬(＊)
松里　俊明

ホルン
飯島　さゆり
小川　正毅(＊)
上久保　奈津子
松浦　光男
源　真理

トランペット
○中西　清一(＊)
小野　美海
後藤　慎介
平林　徹
依田　泰幸

トロンボーン
伊藤　吉隆
恵藤　康充

テューバ
松下　晃一

打楽器
○藤城　佳之(＊)
大河原　渉
辻本　洋一

ハープ
平島　さより
平山　菜津子

ステージマネージャー
青木　勝弘

ライブラリアン
牛尾　京子
長田　康宏

○印は首席奏者
＊印はパートインスペクター